様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０４７５

研究課題名（和文）「女性性」という視点から見るノンエリート若年女性の移行過程

研究課題名（英文）Transition Process of Non-elite Young Women in terms of "Femininity"

研究代表者
杉田　真衣（SUGITA, Mai）

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：５０５３２３２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ノンエリートの若年女性が、不安定化する現代の日本社会に大きく規定され、制約されながらも、自らの生活をいかにつくり出そうとしているかを、インタビュー調査にもとづいて明らかにした。その格闘の過程の中で、彼女たちが社会からいかなる「女性性」を求められ、それとの間でどのように葛藤しているかを描出するとともに、彼女たちの間でつくられ、維持されているゆるやかな関係をも浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：This study illustrated the way the non-elite young women struggled to create their own lives despite being heavily constrained by destabilized contemporary Japanese society, based on the interview research. The study described how they were expected to perform the ‘femininity’ by the society and were conflicted about that, in the process of that struggle. The study also highlighted the important fact that they created and maintained the modest network among them.

研究分野：教育社会学

キーワード：教育学　ジェンダー　セクシュアリティ　移行

１．研究開始当初の背景

1990 年代後半以降、若者の〈学校から仕事へ〉の移行のありようが大きく変容し、若者に焦点をあてた研究が蓄積されてきた。そのなかで明らかにされてきたのは、一口に若者と言っても、学歴、経済的階層やジェンダーといった属性によってその困難のあり方は異なることである。中でも低学歴の若年女性に集中的に困難が現れていることが指摘された（藤原千沙・山田和代編『労働再審 3　女性と労働』、2011、p.27）。しかし、そうした女性たちがどのような労働や生活を強いられ、そのなかでどう生きぬいているかを明らかにする研究は、さほど取り組まれていなかった。

２．研究の目的

本研究では「女性性」に注目し、低学歴、言い換えればノンエリートの若年女性が、不安定化する社会の〈学校から仕事〉への移行過程の中で、いかなる「女性性」を求められ、またその中でいかなる「女性性」を構築しているのかを明らかにすることを目的とした。その上で、彼女たちが自分たちの性を肯定するために既存のジェンダー／セクシュアリティをいかに組み替えようとしているのか、そこにどのような困難や展望があるのかを明らかにすることとした。

具体的な課題としては三つ設定した。第一に、彼女たちが労働と生活の中でいかなる「女性性」を求められているのかを、彼女たちの視点から明らかにすること。第二に、彼女たちが従事する労働の中でも性的サービス労働に焦点をあてながら、それが彼女たちの周辺にどのように存在しているかを明らかにすること。第三に、彼女たちが形成している文化のありようを明らかにしていくことであった。

３．研究の方法

(1)研究代表者を含む東京都立大学／首都大学東京「高卒者の進路動向に関する調査」グループが 2002 年から 2008 年にかけて実施した、2003 年春に都内の公立普通科高校を卒業した若者を対象とした追跡調査の対象者のうち、高卒者の女性 4 名を研究代表者が単独でさらに追跡して 2012 年～2013 年（高卒 10 年目）に実施したインタビュー調査のデータの分析を進めた。それとともに、2015 年（高卒 12 年目）と 2016 年（高卒 13 年目）にも同じ 4 名を対象にインタビュー調査を実施し、30 代に入ってからの彼女たちの労働と生活の状況やそれらにおける意識について聞き取った。

(2)出生時に割り当てられた性別が女性であるセクシュアルマイノリティ―トランスジェンダー男性（FTM）とレズビアン―の若者 6 名を対象としたインタビュー調査を行った。彼ら彼女らが社会から期待される「女性性」を前にいかなる葛藤や困難を抱えているのかを明らかにすることで、「女性性」についてさらに考察するためである。

４．研究成果

(1)追跡調査の対象となったのは、30 代になっても一貫して非正規雇用で働く女性、20 代後半から芸能の道に進み始め、非正規雇用で働き続けながらその道を歩み続ける女性、性的サービス労働の業界で正規雇用でデスクワークをしながら、その収入を一旦全額実家に入れてきょうだいとともに寝たきりの母親を支える女性、高校の同級生と結婚して子ども二人を育てながら非正規雇用で働く女性の 4 人であった。彼女たちがそれぞれに置かれた状況についてだけでなく、彼女たち同士が互いにどのように関わり合っているのか／いないのかについても聞き取った。その結果をふまえて、高校 3 年生から 30 歳になるまでの彼女たち一人ひとりのライフヒストリーを記述し、そこから何が浮かび上がるか

を論じて、単著の図書としてまとめた（図書⑤）。

それぞれのライフヒストリーを詳細に記述することによって描き出すことができたのは、彼女たちの労働と生活の全体像、そして、一見すると無軌道に見えることもある彼女たちの職業履歴の文脈と、その中での彼女たちの一つ一つの選択の合理性であった。たとえば、4 人のうちの 1 人である西澤菜穂子さん（仮名）は、声優を目指し、出会い系サイトのサクラで収入を得ながら、ボイストレーニングの学校や声優の個人指導に通っていた。ボイストレーニングの学校から正規雇用の講師の採用を打診されるが、迷っていた（その後 31 歳の時には、打診を断って学校も辞めていた）。その理由は声優との兼業ができないことと、働く日が固定されて好きなアイドルのコンサートに行きにくくなることであった。その背景には、高校卒業後に就いた正規の仕事で心身ともに傷つき、追い詰められて辞めざるを得なかったこと、その後いくつも経験した非正規の仕事の労働条件も悪く、仕事を通じたアイデンティティ形成など見込めなかったこと、先が見えないなかで結婚願望を抱くこともあったが、結婚もまた容易ではないこと、こうした不安定な生活において、バンドの追っかけをしたり声優を目指したりといったように消費文化世界に生きることに支えられていたことがあった。講師の職に就かないという選択には、不安定な生活を強いられるなかにあっても、彼女が自らの生活を積極的につくっていっている側面があることが見えてきた。

ライフヒストリーを丹念に追うことによって、彼女たち個々人の履歴とその背景だけでなく、彼女たち同士がゆるやかにつながり続けながら、自らの行動様式を文化として把握し、彼女たちなりの〈社会〉をつくりだそうとしている姿もまた読み取ることができた。

(2)前述の図書（図書⑤）では 1 章を割いて性的サービス労働について論じた。その際、彼女たちの労働と生活全体に性的サービス労働を位置づけることで、彼女たちが「女性性」を商品化する仕事への参入を強いられる側面と、にもかかわらず「女性性」を売る仕事の難しさに直面して、時に退出せざるを得なくなる側面とを明らかにした。また、性的サービス労働は女性にとってのセーフティーネットだというように、女性の貧困と性的サービス労働を結びつける議論が少なくないなか、彼女たちの経験やそれにもとづいた語りに依拠して、そうした性的サービス労働をめぐる言説を批判的に検討した（図書②）。「女性性」を売ることへの誤解・偏見、「あってはならない」とするまなざしが性的サービス労働において暴力を引き起こし、被害に遭っても相談しにくい状況をも生んでいることを指摘した。

(3)以上の研究をふまえて、教育、労働、医療、福祉の領域で何が求められているかを考察した（雑誌論文②、③、④等）。また、若者の自己認識にも影響することのある、若者をめぐる言説の分析も行った（図書③、①）。4 人のライフヒストリーを記述した研究（図書⑤）に対し、男性との比較や、4 人が卒業した B 高校ではなく、もう一つの調査対象校であった A 高校を卒業した女性との比較の欠如が指摘されたため、高卒 5 年目まで追跡できた A 高校と B 高校の卒業生の男女計 31 人のデータを取り上げ、その中に改めて 4 人のケースを位置づけ分析した。その結果、低学歴で雇用が不安定な傾向のある B 高校出身女性たちは、就業先においても居住地においても狭い空間内に留まり続けがちであることが浮かび上がった（雑誌論文①）。

(4) 出生時に割り当てられた性別が女性であるセクシュアルマイノリティを対象とした調査については、トランスジェンダー男性（FTM）3 名とレズビアン 3 名の計 6 名にイン

タビューを行ったところで研究期間が終了した。周囲からどのようなことを期待されて育ち、20～30 代に入ってどのように自らの人生をつくっていこうとしているかを聞き取ることができたため、今後、これまでの自身の研究と照らし合わせながら彼ら彼女らの〈学校から仕事へ〉の移行のありようについて考察を進めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　7　件）

①杉田　真衣、東京に生きる若年女性のキャリア―空間的移動に着目して―、教育社会学研究、査読無（依頼論文）、102 集、2018（印刷中）

②杉田　真衣、困難を生きる高卒女性たちと医療、国民医療、査読無（依頼論文、No.336、2017、25-31

③杉田　真衣、高卒女性たちの労働と生活を追って、女性学、査読無（依頼論文）、Vol.24、2017、21-30

④杉田　真衣、高卒女性たちのいま、季刊セクシュアリティ、査読無（依頼論文）、No.79、2017、27-35

〔学会発表〕（計　5　件）

①杉田　真衣、高卒女性たちの労働と生活を追って、日本女性学会 2016 年大会シンポジウム、2016、明治学院大学

〔図書〕（計　5　件）

①杉田　真衣、若者をめぐる自己責任言説に抗して、江口　厚仁・林田　幸広・吉岡　剛彦編著、境界線上の法／主体―屈託のある正義へ、ナカニシヤ出版、2018、210-229

②杉田　真衣、若年女性の貧困と性的サービス労働、松本伊智朗編著、「子どもの貧困」を問いなおす―家族・ジェンダーの視点から、法律文化社、2017、190-206

③杉田　真衣、働く若者はどう語られてきたか、小谷敏編著、二十一世紀の若者論―あいまいな不安を生きる、世界思想社、2017、107-125

④杉田　真衣、高卒女性の一二年をとおして見えてきたもの―若い女性の不安定と貧困、そして明日、唐鎌直義・尾藤廣喜・稲葉剛・青砥恭・藤田孝典・松本伊智朗・川口洋誉・杉田真衣・森田基彦・中西新太郎、ここまで進んだ！格差と貧困、新日本出版社、2016、133-158

⑤杉田　真衣、高卒女性の 12 年―不安定な労働、ゆるやかなつながり、大月書店、2015、240

〔その他〕

①杉田　真衣、貧困の中の子どもたちと生活指導の課題、高校生活指導、205 号、2018 年、84-91

②杉田　真衣、子どもを産み育てられない社会を変えていくために、クレスコ、No.200、2017、24-27

③杉田　真衣、坂井　美津江、黛　千恵子、加藤　伊都子、ジェンダーの暴力～“みんな”の不自由さを解き明かす～、フェミニストカウンセリング研究、Vol.14、2017、74-105（学会シンポジウム記録）

④杉田　真衣、若い女性たちのことを想像する、少女 若年女性を支援する人のためのハンドブック　若草プロジェクト支援マニュアル、2017、11-17

⑤杉田　真衣、高卒女性の 12 年―労働と生活、職場の人権、第 96 号、2016、25-47（報告記録）

⑥杉田　真衣、若年女性の現実から考える子どもの貧困、子どもの権利条約市民・ＮＧＯ報告書をつくる会、学習会報告集　第 2 集子どもの権利の新たな課題 2016、2016、76-83（講演録）

⑦杉田　真衣、「ノンエリート女性」のキャリア形成と学校教育、慶應義塾大学教職課程

センター年報、第 24 号、2016、55-79（講演録）
⑧杉田　真衣、若い女性たちの軌跡を追い続けて、婦人通信、No.169、2016、2-3
⑨杉田　真衣、高卒若年女性の仕事と生活を追う、We Learn、735 号、2014、6-9

６．研究組織

(1)研究代表者

杉田　真衣（SUGITA, Mai）
首都大学東京・大学院人文科学研究科・
准教授
研究者番号：５０５３２３２１